

The Comedy of Errors について

内 山 倫 史

The Comedy of Errors は、*Love's Labour's Lost*, *The Two Gentlemen of Verona*, *The Taming of the Shrew* とともに、Shakespeare の最も初期の喜劇作品の一つである。この喜劇の原典は、ローマの喜劇作家 Plautus の *Menaechmi* であり、更に同じ作家のもう一つの作 *Amphitruo* から、多くの喜劇的要素が取り入れられている。然し Shakespeare はこのローマの喜劇をただたんに翻案したのではなく、彼自身の独創的なものを多くつけ加え、*The Comedy of Errors* 全体の雰囲気、Plautus のものと非常に違つたものになっている。

この小論の目的は、その相違を考察して、習作時代における Shakespeare に、己に後期の大作への萌芽が見出されることを解明することにある。

(1)

S. T. Coleridge は、*The Comedy of Errors* を評して、“The myriad-minded man, our, and all men’s, Shakespeare, has in this piece presented us with a legitimate farce in exactest consonance with the philosophical principles and character of farce, as distinguished from comedy and from entertainments.” と述べ、この喜劇が徹頭徹尾 ‘farce’ であることを強調している。然し我々がこの喜劇を詳細に考察する時、Shakespeare が Plautus の作品を改変することにより、後期の大作を思わせるすばらしい喜劇へ発展させていることがうかがえるのである。

先づ、Plautus の作品では、父は劇が始まる前に亡くなつており、母は全くあらわれていないが、Shakespeare はそれを変え、この「喜劇」には、Syracuse の Antipholus 及び Ephesus の Antipholus の父母、Egeon と Emilia を登場させ、劇全体に統一を与えていることは注目に値する。つまり *The Comedy of Errors* は、Syracuse の商人 Egeon 一家の ‘relationship’ ——嵐による一家の離散から最後の再会——という一本の太い線で最初から終りまでつらぬかれ、この劇の中心の plot である「人違い」(‘mistaken identity’) もその枠の中で行われ、すぐれた喜劇的効果を取めているのである。

この劇は先づ Egeon が Ephesus の街に捕えられ、処刑直前の立場にあるところから始まるが、第一幕第一場、Ephesus の大公 Solinus に、Egeon が Ephesus へ来た理由を説明する台詞 (1.1. 31-95, 98-120, 124-139) は、この劇の雰囲気をかもしだすのに極めて重要である。Egeon は Solinus に、帰口の途中嵐にあい、妻子と別れ別れになつて Ephesus へ辿りついたことを説明するが、Shakespeare の劇においては、嵐、難船、別離、再会は、屢々後期の作品に用いられているテーマであり、己にこの初期の作品においてもそのテーマがうちだされていることは注目に値する。更に、この劇においては、第一幕第一場の難船は、第一幕第二場以後の「人違い」(‘mistaken identity’) の plot を展開させる上にも極めて重要である。このように、第一幕第一場は、この劇全体のプロローグのよ

うな役割を果し、以後スピーディに場面が展開されていくのである。

(2)

The Comedy of Errors の原典である Plautus の *Menaechmi* においては、一組の双生児しか用いられていないが、Shakespeare はそれを改変して、二組の双生児を用いた。この劇では、Syracuse の Antipholus と Ephesus の Antipholus, それに加えて、彼等の召使である Syracuse の Dromio と Ephesus の Dromio, という二組の双生児を作りあげた為、「人違い」('mistaken identity') の可能性は大きくなり、事件は益々複雑になつて、すぐれた喜劇的効果を収めている。

先づ 'mistaken identity' が幕をあけるのは、第一幕第二場、Syracuse の Antipholus が、1,000マルクのお金を持たせて Centaur 館へやつた筈の Dromio 弟がすぐ戻つてきた、と思つたところからである。実はこの男は双生児の Dromio 兄の方で、女主人 Adriana の命令で、彼の主人の Ephesus の Antipholus を迎えにきたのである。ここでお互いに相手の云うことが通じない為一騒動起るのである。Syracuse の Antipholus は Dromio 兄に、「きさまにわたした 1,000 マルクのきんすはどこにある。」と尋ねると、Dromio 兄は次のように答える。

I have some marks of yours upon my pate,
Some of my mistress' marks upon my shoulders,
But not a thousand marks between you both. (1.2.82-84)

'marks'——「傷跡」と「マルク」——の pun に気がつかぬ Syracuse の Antipholus は、Dromio がてつきり彼の金をごまかしたと思い、「間違い」の Plot が展開するのである。特に、'a thousand marks' の用い方は巧みである。

これを切りだしに次々と「間違い」が起り、「人違い」が主要な役割を演ずるが、更に、この喜劇の重要なテーマの一つは、'mistaken identity' による 'loss of identity' のテーマである。Syracuse の Antipholus も、Dromio 弟も、余りにも屢々起る 'mistaken identity' の為、遂には「自分を見失う」ようになるのである。

このテーマが最初にうちだされるのは、第一幕第二場、冒頭、商人 A が Syracuse の Antipholus に云う台詞の中である。Syracuse の Antipholus は、Dromio 弟と一緒に、母と兄を探す旅に出て Ephesus に辿りついたのであるが、彼に向つて商人 A は次のように云う。

give out you are of Epidamnum,
Lest that your goods too soon be confiscate; (1.2.1-2)

これにすぐ続く台詞の中で、「今日も Syracuse の商人が当地に來た為捕えられ、身代金を払うことができず、この町の法令により死刑になる。」(1.2.3-7) ことを述べ、彼に Ephesus では素性をかくすよう忠告し、再会を約して立ち去る。商人 A と別れた Syra-

cuse の Antipholus は次のような独白を述べるが、この台詞の中にも、'loss of identity' のテーマがはつきりあらわれている。

I to the world am like a drop of water,
That in the ocean seeks another drop,
Who, falling there to find his fellow forth,
(Unseen, unquixitive) confounds himself.
So I, to find a mother and a brother
In quest of them, unhappy, lose mysell. (1. 2. 35-40)

この台詞は、この劇における彼の役割を象徴しているものとして重要である。彼は、母と兄を探し求める時、屢々起る 'mistaken identity' のため、遂には「自らをも見失ってしまう」のである。Shakespeare は、それを、「大海原にもう一滴を探し求め、仲間を見つけ出そうと海にとびこみ、遂にはその形を失ってしまう一滴の水」のイメージであらわしているのである。この「一滴の水」のイメージは、第一幕第一場で、Egeon が Solinus に、一家離散の有様を難船のイメージで説明した為のイメージの流動と考えられる。然し、Shakespeare が後の作品で「自己を失う」ことを屢々 'waterdrops' や、'melting' のイメージであらわしていることを考えると、この初期の作品に己にその技巧が見出されることは注目に値する。

第一幕第二場は 'mistaken identity' による 'loss of identity' のテーマで終始しているが、この場の最後にあらわれる Syracuse の Antipholus の次の独白も重要である。

They say this town is full of cozenage;
As, nimble jugglers that deceive the eye,
Dark-working sourcerers that change the mind,
Soul-killing witches that deform the body,
Disguised cheaters, prating mountebanks,
And many such-like liberties of sin:
If it prove so, I will be gone the sooner.⁶⁾ (1. 2. 95-103)

Shakespeare は、原典 *Menaechmi* にあらわれる町 Epidamnum を、この台詞にみられるように、聖書の中の、'socery'⁷⁾ で有名な町 Ephesus に改変した為、ここでは、「眼をあざむく」とか、「心をまどわす」等の言葉で示されるように、一段と 'loss of identity' の雰囲気がかもしだされているのである。

さて、'mistaken identity' の連続で、Syracuse の Antipholus も、Dromio 弟も、次第に「自分自身が分らなく」なり、'loss of identity' のテーマは、第二幕第二場、二人が Adriana と Luciana に話しかけられる時、クライマックスに達する。特に、Dromio 弟は、全然知らない相手から名前まで呼ばれ、びつくりして次のように述べる。

Syr. Dro. *I am transformed, master, am I not?*

Syr. Ant. I think thou art in mind, and *So am I*.
 Syr. Dro. Nay, master, both in mind and in my shape.
 Syr. Ant. Thou hast thine own form.
 Syr. Dro. No, I am an ape.
 Luc. If thou art chang'd to aught, 'tis an ass.
 Syr. Dro. 'Tis true, she rides me, and I long for grass;
 'Tis so, I am an ass⁸⁾... (2.2.195-201) (イタリックは筆者)

二人は、遂に自分自身が別のものに 'transformed' (変ってしまった) ように感じるのである。この台詞にもあらわれているが、"ass" とか、"ape" などの 'animal images' がこの劇に頻出すること⁹⁾も 'loss of identity' のテーマを強めているものとして注目に値する。

(3)

第一幕、第二幕は、'mistaken identity' により、Syracuse の Antipholus と Dromio 弟が 'loss of identity' を経験するテーマが中心となつていますが、第三幕、第四幕になると、更に新しいテーマ——disruption of relationships——に発展する。

'family reunion' を求め、母と兄を探しに出た Syracuse の Antipholus は、皮肉にも、至る所で正常な関係の破壊者になつている。

先づ 'mistaken identity' によつて Adriana の家へ行くことにより、第三幕第一場で、Ephesus の Antipholus が閉め出しをくう原因を作り、Adriana と彼女の夫、Ephesus の Antipholus との正常な夫婦関係にひびをいれることになる。¹⁰⁾ 第四幕では、首飾りの件で、Ephesus の Antipholus と金細工師 Angelo の関係を、更に商人 B と金細工師 Angelo 及び Ephesus の Antipholus との関係を台なしにする。一方、彼はいつも間違つた Dromio に合うことにより、両 Dromio は主人に打擲され、その為主人対召使いの関係を破壊することになるのである。その結果 Ephesus の町は、その名にふさわしい Chaos の場となる。

Shakespeare は、或るイメージを一つの場面に集中させ、その場の雰囲気をつかめるのにすぐれた劇作家であるが、¹¹⁾ 第四幕においても、"devil" というイメージを頻出させ、その効果をあげている。Syracuse の Dromio は、Ephesus の Antipholus が逮捕されたのを、主人の Syracuse の Antipholus が逮捕されたものと思い、その事を Adriana に話す際、警吏を "devil" と呼び、"one that, before the judgment, carries on souls to hell;" (4.2.40) と述べている。娼婦に話しかけられる Syracuse の Antipholus は、"Satan avoid, I charge thee tempt me not." (3.4.46) と叫び、Dromio 弟と次のような言葉のやりとりをするが、その台詞の中にも "devil" のイメージがあらわれる。

Syr. Dro. Master, is this mistress Satan.
 Syr. Ant. It is the devil.
 Syr. Dro. Nay, she is worse, she is the devil's dam; (3.4.47-49)

又同幕同場、主人を狂気と思つた Adriana は Pinch となる教師をつれてきて、主人を

正常にもどそうとするが、Pinch も Ephesus の Antipholus の体内に「悪魔」が住みついているものと思い、次のように叫ぶ。

I charge thee, Satan, hous'd within this man,
To yield possession to my holy prayers,
And to thy state of darkness hie thee straight;
I conjure thee by all the saints in heaven.” (4. 4. 52-55)

このように “devil” とか、それに関係のある “Satan”, “hell” 等のイメージの頻出により、正常な人間関係を破壊された人達、及びその人達の住んでいる混沌とした町の姿が巧みに浮彫りにされている。

第五幕になつてようやく正常な “relationship” がとりもどされるが、その立役者は、Shakespeare が原典を改変して創造した人物、今は尼僧院主の Emilia である。背景を、尼僧院という宗教的雰囲気のある場所にしたのも、最後の和解の場としては極めて適切な技巧である。¹²⁾ 又、この場で公爵 Solinus が、Egeon、首斬り彼人その他の者を従えて登場することにより、第一幕第一場の Egeon に関する場面が再び展開され、この劇の結びとしては効果的である。ここで、Egeon、妻の Emilia、Antipholus 兄弟、Dromio 兄弟等すべての者が顔を合わせ、尼僧院主 Emilia の仲立ちにより、‘mistaken identity’ によるすべての誤解は解消する。この場における公爵の次の台詞、*“Why, what an intricate impeach is this?/I think you all have drunk of Circe's cup.”* (5. 1. 270-1) (イタリックは筆者) は、今迄「自己を失つていた」人達の有様を巧みに述べている。R. A. Foakes は、この最後の「和解」の場面を評して、*“Bitterness gives way to harmony, a harmony celebrated in a feast that marks a new beginning, a new life, a baptismal feast, from which Antipholus of Ephesus will not be excluded. Here the characters recover or discover their real identity, order is restored, and the two pairs of twins follow the others off the stage, that masters embracing, the servants hand in hand. Violence is replaced by mildness and love, and the sense of witchcraft, evil and circean transformation is dispelled.”*¹³⁾ と述べているが適切な言葉である。この最後の場面には、何かキリスト教的恩寵の色が、ありありとうかがわれる。

(4)

最後に、The Comedy of Errors における登場人物の性格描写を考察してみたい。Shakespeare は、この点に関して Plautus の作品のようにタイプ化していない。

先づ二人の Antipholus であるが、兄の Ephesus の Antipholus は、かなりの放蕩者であり、乱暴で、粗野で、衝動的な男であるが、戦争で主君の命を救うという手柄もたてている。又娼婦とつき合う理由としても、「その女のことで、べつに文句を云われるすじあいはないのに、女房はしよつちゆうごたごた云いましてね」(3. 1. 111-113) と云っている。このように、彼は粗野、粗暴ではあるが、人間の感情の機微をよくわきまえている男として描かれている。

弟の Syracuse の Antipholus の方は、兄と対照的であり、幾分沈み勝ちな、まじめで、慎重な男である。このことは、第一幕第二場の、“I to the world am like a drop of water” (1.2.35) 以下の独白や、第三幕第二場における Luciana との対話にあらわれている。

又、二人の Dromio にしても、兄の Ephesus の Dromio は真面目なタイプで、いつも間違えられては、主人や他の連中に殴られている典型的な従僕である。一方、弟の Syracuse の Dromio の方は、陽気で、絶えず冗談を云つては沈み勝ちな主人を元気づけたりしている。又 ‘mistaken identity’ のため、主人に殴られれば、“Was there ever any man thus beaten out of season/When in the why and the wherefore is neither rhyme nor reason?” (2.2.47-48) と対等に口をきいている。

このように、Shakespeare は、二人の Antipholus 及び Dromio¹⁵⁾ 兄弟の性格の差をはつきり強調して、Plautus の作品より、よりリアリティを与えている。

更に、*The Comedy of Errors* の性格描写の中で注目すべき点は、Shakespeare が、Plautus の作品にあらわれない Luciana という女性を創造したことである。彼女が創造されたため、Syracuse の Antipholus が彼女に恋をすることによつて、この劇に、よりロマンチックな恋の雰囲気を与えられている。*The Comedy of Errors* においては ‘love theme’ は極めて簡単にしか取り扱われていない。然し、Shakespeare の後の喜劇作品で重要なテーマとなる ‘love theme’ の萌芽が、己にこの作品にあらわれていることは注目に値する。

さて、この劇における Luciana の重要な役割の一つは、彼女の結婚観が、姉の Adriana の結婚観と対照的におかれている点である。両者の態度の違いは、先づ、第二幕第一場の二人の対話にあらわれる。Adriana は、食事に時間通りにもどつてこない夫を評して、「何故男の自由は女の自由より大きくななければならないの。」(2.1.10) と述べるのに対して、Luciana は、「だつて、男の仕事は家の外にあるものです。」(2.1.11) とか、「けものも魚も鳥も、みな男につかえ男が支配しているわ。」(2.1.18-19) と答え、更に「万物の霊長」である人間も、「やはり男が女の主人であり、君主でもある」(2.1.24) と、Adriana と対照的な結婚観を示し、この劇に、やさしい愛の雰囲気を与えている。

Adriana と Luciana の結婚観の相違がよりはつきりあらわれるのは、Adriana の次の台詞である。

Hath homely age the alluring beauty took
From my poor cheek? Then he hath wasted it……
What ruins are in me that can be found
By him not ruin'd? Then is he the ground
If my defeatures.¹⁷⁾

(2.1.89-98)

Adriana は、夫が自分のもとを離れるのは、自分の容色が衰えたためだと思ふのである。¹⁸⁾ 彼女の結婚観は、精神的なものと云うより、外見的なものに基づいているのである。後に、Syracuse の Antipholus が Luciana に求婚した時、自分の夫が求婚したものと思ひ、“deformed, crooked, old and sere,/Ill-fac'd, worse bodied, shapeless every-

where: /Vicious, ungentle, foolish, blunt, unkind, /Stigmatical in making, worse in mind.” (4. 2. 19-22) と述べる台詞の中にも、その考えがはつきり打ち出されている。

Luciana の結婚観が、「私は恋を知る前に従順になるけいこをしておくつもりです。」(2. 1. 29) と、自らを相手に与える結婚観であるのに対し、Adriana の結婚観は、更に「所有」して「支配する」結婚観とつながっていく。「所有」に関する彼女の結婚観は、第二幕第二場、Syracuse の Antipholus を夫と思い、家へ帰るようすすめる時の次の台詞にあらわれている。彼女は草木のイメージを用いて次のように云う。

Come, I will fasten on this sleeve of thine :
 Thou art an elm, my husband, I a vine,
 Whose weakness married to thy stronger state
 Makes me with thy strength to communicate :
 If aught possess thee from me, it is dross,
 Usurping ivy, brier, or idle moss. (2. 2. 175-80)

彼女のこの結婚観は、遂には嫉妬につながるものである。第五幕第一場、尼僧院主の Emilia は彼女を諭して次のように云う。

The venom clamours of a jealous woman
 Poisons more deadly than a mad dog's tooth……
 The consequence is, then thy jealous fits
 Hath scar'd thy husband from the use of wits. (5. 1. 69-86)

The Comedy of Errors 中の理想的な結婚観は、Adriana のように「相手を所有する」のではなく、Luciana のように「相手に自己を与えることである。このようにして、始めて正常な男女の 'relationship' が成立するのである。

Syracuse の Antipholus も、Ephesus へきて「自己を失い」(1. 2. 40) ながらも、Luciana への愛によつてもとの自分をとりもどすのである。Luciana は彼にとっては、*“mine own self's better part, /Mine eye's clear eye, my dear heart's dearer heart, /My food, my fortune, and my sweet hope's aim, /My sole earth's heaven, and my heaven's claim.* (3. 2. 61-64) なのである。このように、この劇における Luciana は、ただ単に Adriana との対照を提供するばかりではなく、この劇に 'romantic love' の雰囲気を与え、更に、この劇のテーマになつている Syracuse の Antipholus の 'loss of identity' の回復に重要な役割を果たしているのである。

以上、*The Comedy of Errors* において、Shakespeare が、原典である Plautus の *Menaechmi*, 及び *Amphitruo* の plot をどのように改変したか、又、新しい作中人物 Luciana を創造したり、その他の人物の性格描写を変えることにより、この劇をいかにすぐれた喜劇に発展させたかを考察した。更に、この最も初期の喜劇の中に、早くも後期の大作の芽が、いくつかうかがえることも指摘した。

(注)

- 1) T. M. Raysor (ed.), *Coleridges Shakespearean Criticism*, vol. 1. (1961), P. 89
- 2) T. M. Parrott は, *Shakespearean Comedy* (1949), P. 105 で *The Comedy of Errors* を “best plotted of Shakespeare's early comedies” と云っている。
- 3) E. M. W. Tillyard は, *Essays* (Literary & Educational), (1964), P. 19 で “sinking ship”, “separation” というテーマが Shakespeare に非常にうつたえたこと、及び, “exile”, “dispossession”, “threat of death” が Shakespeare の作品の common background であることを指摘している。
- 4) *Pericles*, *The Tempest* 等参照。
- 5) “To melt myself away in water-drops” (Richard II, 4. 1. 262), “O that this too, too solid flesh would melt” (*Hamlet*, 1. 2. 129-130) 等を参照。
- 6) R. A. Foakes は *The Comedy of Errors* (The Arden Shakespeare) の注で、次のように述べている。“No doubt this passage owes something to Acts xix, where St. Paul's visit to Ephesus, and his dealings with those who used 'curious arts' is reported (so Baldwin, and see Noble, PP. 106-7); and Ephesus would be known to an Elizabethan audience as associated with magic through this passage.
- 7) この劇には、これに関する表現が屢々あらわれる。“There's none but witches do inhabit here.” (3. 2. 155) や “Lapland socrers (4. 3. 11), “socrers” (4. 3. 63. 64)。
- 8) 第三幕第二場、Dromio 弟は、Adriana の女中の Nell に彼女の “man” と呼ばれ、その事を Syracuse の Antipholus に話す台詞の中にも、“ass” と云う言葉があらわれ、‘loss of identity’ のテーマが強められている。“I am an ass, I am a woman's man, and besides myself.” (3. 2. 76)
- 9) Harold Brooks は Themes and Structure in *The Comedy of Errors* (Early Shakespeare 3), Arnold, P. 68 で “The dominant imagery, of man as beast, reflects the ideas of illusory appearance and malign metamorphosis.” と述べている。
- 10) ここでは、Ephesus の Antipholus が ‘mistaken identity’ により ‘feast’ を妨げられるのであるが、G. Wilson Knight は *The Imperial Theme*, London, 1954, P. 137 で、‘feast’ が妨げられるのは、Shakespeare の作品にあつては、‘chaos of disorder’ をひきおこすことを指摘して *Macbeth* より例をあげている。
- 11) *Macbeth* の “sleep” 及び “sleep” に関係のあるイメージが集中的にあらわれ、すぐれた劇的効果をあげている点を参照。
- 12) *Pericles* の最後の場面と比べると、極めて興味がある。
- 13) R. A. Foakes, *The Comedy of Errors* (The Order Shakespeare), 1962, P. xlix.
- 14) 第三幕第一場、家からしめだされた時や、気狂と間違えられた時の暴れぶりに、又、娼婦ともつきあっている事などにはつきりあらわれている。
- 15) Plautus の *Menaechmi* では、二人のメネクムスの性格についても、その差は殆ど強調されていない。
- 16) Shakespeare の描く Adriana は、じやじや馬であるが、Plautus の作品と比べれば、ずっと個性化されている。彼女の嫉妬は夫への深い愛に根ざしているのである。
- 17) Adriana はこのようにのべているが、かつては二人の関係が次の台詞りあらわれるようなものであつたことは注目に値する。つまり、*The Comedy of Errors* においては Luciana のような結婚観がこの劇のテーマからしても（この劇の最後の場面を参照）重要なのである。

The time was once when thou unurg'd wouldst vow,
That never words were music to thine ear,
That never object pleasing in thine eye,
That never touch well welcome to thy hand,
That never meat sweet-savour'd in thy taste,

Unless I spake, or look'd, or touch'd, or carv'd to thee (2.2.115-120)

- 18) このような結婚観が間違っていることは、Shakespeare が、後の *The Merchant of Venice* の中で Nerissa に歌わせている次の歌の中や、"All that glisters is not gold" (2.7.65) という Morocco の王子の言葉の中にあらわれている。

Tell me where is fancy bred,
Or in the heart or in the head?
How begot, how nourished?

Reply, reply.

It is engend'ed in the eyes,
With gazing fed; and fancy dies
In the cradle where it lies.

(3.2.63-69)

- 19) John R. Brown は、Shakespeare and His Comedies (London, 1957), PP.54-57 の中で、この点に関し詳細に論じている。

- 20) Would you create me new?

Transform me then, and to your power I'll yield, (3.2.39-40)